４　得意時代と失意時代

「人間万事塞翁が馬」という諺がある。人生の禍福（吉凶）は簡単には定めがたいという格言として人口に膾炙しているが、それは次のような故事に由来する。昔、中国北辺の国境近くに塞翁という老人が住んでいた。ある時、その老人の馬が逃げてしまったが（不幸)、間もなくその馬がすぐれた一頭の馬を連れて戻ってきたので人々が祝福した(幸)。ところが、老人の子がその馬に乗って落ち、怪我をしてしまった（不幸)。そのうちに戦争が起こり、若者たちは殆んど戦死したが、怪我をした老人の子は兵役を免れて死なずにすんだ（幸)、という故事である。

人生には、思いがけないことで幸福を招くことがあり、また、思いもかけない不幸になったりするものだ。一時の成功とか失敗とかは、長い人生には泡沫(あわ)のようなもので、一喜一憂してもはじまらない。人とは順境にある時は得意の絶頂となって調子に乗り、逆境にある時は失意のどん底に陥る弊(へい)がある。

渋沢栄一は、「得意時代だからと気を緩さず、失意時代の時だからとて落胆せず、常操（注1）をもって道理を踏み通すように心掛けて出ること」（「得意時代と失意時代」『論語と算盤』所収）が肝要であり、「名を成すは常に窮苦の日に在り、事を敗るは多く得意の時に因す」という古人の警句を拳拳服膺(けんけんふくよう)すべきと述べている。

得意の絶頂にいる時は極めて危険である。このような時は心に油断を生じ、外界の誘惑に負けて、終(つい)に一身を誤ることになるからである。得意時代だからといって気を許さず、道理を踏み通すように常に信念を固く守って変えない心掛けが必要である。

一方、逆境に陥るのは、多くはその人の知識・勉強・忍耐などが足らないためであるから、逆境に当たっては落胆せず、まず天命と思い、勉強・忍耐をもっておもむろに来るべき運命を待つことである。この時、決して逃げないという覚悟が大切である。